

高橋赤水と六人の漢学者

有馬 卓也

目次

はじめに

第1章 皆川淇園と猪飼敬所

第2章 大田錦城と篠崎小竹

第3章 鈴木子敬と藤沢東咳

おわりに

高橋赤水略年譜

はじめに

江戸時代後期、阿波藩平島の庄（現徳島県那賀郡那賀川町）にあった平島公方（阿波公方）の学問所栖龍閣¹に出入りしていた町医者高橋赤水（一七六九―一八四八、諱は祐、字は子信、称は龍朔）は、荻生徂徠に私淑する古学者でもあった。現存する彼の著作『赤水文抄』『古今学話』をひもとけば、当時の主流派であった朱子学の諸説に反駁を加え、孔子本来の教えに立ち戻って経典解釈を行うべきであるという古学者としての堂々の論が展開され

ている。しかしながら、赤水本人については、この二つの著作と墓碑銘³が主な手がかりとなるばかりで、その生き様がはっきりとは浮かび上がっていない。

そこで今回は『赤水文抄』『古今学話』及び墓碑銘に名前の見える人々と赤水との交流の軌跡を追い、資料に乏しい赤水の実像を明らかにしてみたい。

そして、特に本稿では、赤水の受講期・著述期・指導期のそれぞれに於ける交流者、即ち受講期の皆川淇園と猪飼敬所、著述期の大田錦城と篠崎小竹、指導期の鈴木子敬と藤沢東咳の六人を取り上げ、赤水の足跡や思考の経緯を検証する。

第1章 皆川淇園と猪飼敬所

まず第1章では、高橋赤水が実際に師として学んだ二人の漢学者、皆川淇園（一七三四―一八〇七、名は愿、字は伯恭）と猪飼敬所（一七六一―一八四五、名は彦博、字は文卿・希文）について言及する。赤水が二人に学んだことは墓碑銘の

「（父の）遺命を受け、（京都に）重遊して（医学の）業を修む。

兼ねて皆川淇園に従ひ、『左氏春秋』を受け、作文を学び、弱冠（天明八年、一七八八）にして帰る」（墓碑銘）及び、

「壬戌の秋（享和二年、一八〇二）、又京に遊び、猪飼敬所に従ひて、天文律曆・上下古今を質し、經典を商榷す」（墓碑銘）という記述から知ることができる

一 赤水の交流者として、まず第一に挙げるべきは皆川淇園であろう。赤水は一五歳の時に医学を修めるために初めて京都に遊学するが、ひと月後に父の病で帰郷する。そして、その父の死後の再遊学の時に、淇園の門をたたいているわけであるから、おそらく一六―二〇ぐらいの三四年の間、医学を修めるかたわら、淇園のもとで学んだと推定される。

さて、皆川淇園と言えば、主著『名疇』で知られるように、祖徠の『弁名』や仁齋の『語孟字義』と同様、朱注の誤りを指摘し、文献学における考証学的合理性を追求した人物である。

赤水は後に自らの学問を述懐して

「余、漢宋二家を学び、竟に漢に左袒す……」（古今学論）

「祐は業已に漢宋二家を学ぶ。道の大体を以て之を論ずれば、漢、正を得」（復敬所翁）

「余、幼にして程朱学を学べり。弱冠の比、やや疑を生じ、因て和漢諸古学家の書を涉獵し、而、目を六経に遊ばしむること四十年」（古今学話）

と言っており、宋学から漢学（古学）へと移行した経緯をもつ。墓碑銘には「翁（赤水の父）親ら句読を授け……」とあるのみで、

赤水が宋学を誰から学んだかは不明であるが、当時の状況を考えれば、京都に出る一五歳までの間に阿波の藩校或いは私塾などで学んだと考えるのが一般的であろう。

そして『古今学話』に「弱冠の比、やや疑を生じ」とあることから、赤水が本格的に古学を信奉し始めたのは、京都から郷里の阿波藩那賀川町へ戻ってからのことである。しかしながら、淇園の朱注を否定する立場は、何らかの示唆を赤水に与えたと考えて大過あるまい。しかし残念なことに、淇園と赤水の関係については、その詳細を知る手がかりがなく、これ以上の論及はできない。ただし、赤水は後に淇園の弟子大田錦城、及び錦城の弟子鈴木敬と交流することになる。この両者については、2章及び3章で言及する。

二

青年期の師を淇園とすれば、壮年期の師が猪飼敬所である。敬所は淇園にも学んだことのある巖垣龍溪（一七四一―一八〇八）に師事して経書を修め、古注に基づいて諸家を折衷するという立場を取った人物であった。

享和二年（赤水三四歳）、彼は京都へと赴き、敬所の門をたたいている。時に敬所四二歳。赤水と敬所の交流については、墓碑銘にも

「郵筒往来し、論難相尋げり」（墓碑銘）

とあり、書簡の往復があった。その一部が『赤水文抄』及び『猪飼敬所書東集』に収められている。ただし、後者に収められた敬所の赤水宛書簡には敬所の日常事が記されるのみで、思想的な論争については述べられていない。本稿では『赤水文抄』所収の「敬

所翁に復す」をかいつまんで検証してみたい。

まず、赤水が敬所に書簡を宛てた理由は、先に敬所から次のように言及されたことによる。

「今少しく才学ある者は、皆徂徠を厭ふ。而るに足下は独り之を奉ず。他人の以て徂徠の奴隸と爲すを恐る」(「復敬所翁」)

ここで敬所は徂徠学を信奉する赤水が「徂徠の奴隸」とのそしりを受け排斥されるのではないかと危惧している。この敬所宛書簡はそれに対する反駁である。まず赤水是次のように述べる。

「先生、以て祐の徂徠に於けるや、猶ほ暗齋の朱子を奉ずるが如しと爲すか。爾らずんば則ち何ぞ此の言あるか。祐、嘗て「論語徴」の譌を糾し、旁ら「学庸二弁」に及ぶ。又た「文家正名」を草して、其の名を乱すを斥く。奴か奴ならざるかは、見る者既に之を知る」(「復敬所翁」)

決して自分は徂徠に拘泥する者(徂徠の奴隸)ではないことを、自分が徂徠の主著である「論語徴」「大学弁」「中庸弁」の誤りを「論徴二弁攷」に於て正し、また「文家正名」に於て正名論を論じたことで証としている。さらに自らの学問的立場については、「子曰く「衆の之を惡む、必ず察す」と。祐、固より其の説を察す。慎んで諸を經に考へ、而る後に其の合ふものを取り、其の合はざるものを舍つ。偏することなく党することなく……」(「復敬所翁」)

と述べ、自らの学問は經書に基づくものであり、その立場が「稍世儒の見と異なる」(「復敬所翁」)のだとしている。そして、改めて世に厭われる徂徠について次のように説明する。

「蓋し世儒の徂徠を惡むに、祐、其の七を知る。①才氣に負恃

し、一世を蔑視し、宋儒を惡むこと已に甚だしく、或いは其の是を叩斥す。②經を解するに一へに古文辭に徴し、或いは牽強に屬し、江都を重んじ京師を輕んず。③之を以て政を談するに、人の情に協せざる者あり。④之を以て名称を立つるに、礼義に合せざる者あり。此の四者は徂徠の失なり。①世儒、才学に抗せんと欲するも足らず、妬心もて以て之を惡み、己の主張する所と相ひ合はざれば則ち又た之を惡み、平心もて其の書を読まず。②是を以て徒に其の短を責めて其の長を觀ず。③巧みに詭辭を弁じ、務めて其の学を惡む。此の三者は世儒の失なり。徂徠の罪に非ず」(「復敬所翁」・文中の番号は筆者による)

ここで赤水は、「徂徠の失(四条)」及び「世儒の失(三条)」を列挙し、徂徠のみに非があるのではないことを敬所に述べている。これに関しては、『古今学話』にも次のような同旨の文が見える。「昔時、徂徠が宋儒を非議し、程朱諸老のいふ所を貶斥するは、徒に之を惡むにあらず。先王孔子の道に害あるを以なり。但その言とる温厚從容の氣象をかく。是此翁の癖なり。然れども論駁する所は公正と云べし」(「古今学話」)

両文を合わせ考えれば、徂徠はあくまで宋学者の誤解を正す立場を取る者であり、宋学者の徂徠批判は学説よりも徂徠の人格的問題に終始していることであろう。そして一般の徂徠評は客觀的を欠くものであるとし、次のように徂徠の長所を評している。

「世人、動すれば徂徠が徳、その才を掩はざるを見て、その学を賤む。余は之に異り、其見識卓絶、道をみることの明なるに服するのみ」(「古今学話」)

また赤水は自分が古学に拘泥する者でもないことを次のように

記している。

「蓋し古今の学は、少しく異同ありと雖も、之を要するに漢宋二家を出でず。而るに漢学必ずしも是ならず、宋学必ずしも非ならず。是に於てか彼を摘み此を取り、間又た附するに己の見を以てす。是れ勢の自然なるのみ」(「復敬所翁」)

つまり、漢代の学にも、宋代の学にも、長所短所はそれぞれあるのであり、自分は宋学を全否定する者ではないとの主張である。この考えは、「古今学話」でより詳しく次のように述べられている。

「漢儒に真儒の徳すくなしと雖も、その訓ずる所は七十子の遺訓を奉ずる者にして、先王孔子の道に冥ることすくなし。宋の諸老の如き、修身を以て本とし、言行つ子に違はざることを希ふ。真儒の風有と謂べし。然どもその学は心性窮理を貴で、聖を遵奉するの意薄に似たり。故にその末弊聖を以て自処し、夫子の言といへども、時乎従はざるもの有。余ひそかに謂く、宋の諸老の志を希ひ、周漢の学に従事せば、聖旨に違反すること無く、其弊なからん」(「古今学話」)

ここで赤水は、漢学者が暗記暗誦や訓詁に終始して自己の修養をないがしろにしている点と、宋学者が孔子本来の教えを無視して心性の学に拘泥しているという点とを踏まえた上で、漢学と宋学との折衷を説いている。すなわち「宋の諸老の志を希ひ、周漢の学に従事」という立場である。そして、改めて徂徠こそは「孟子」尽心上に言う所の「豪傑の士」(「復敬所翁」)であるとした上で、

「平に其の学を考ふるに、徂徠は古に近し。迺ち従りて以て漢の缺漏を補ひ、又た以て宋の善説を拾ふは、其れ是れのみ」

(「復敬所翁」)

と徂徠の折衷者としての在り方を評価している。

本書簡では敬所の赤水に対する真意のほどがわからず、これ以上は語れないが、少なくとも敬所が危惧するほどの赤水の徂徠への傾倒ではあつたようである。

第2章 大田錦城と篠崎小竹

本章では、古学者として著述を為し始めた頃の交流者、大田錦城(一七六五—一八二五、名は元貞、字は公幹)と篠崎小竹(一七八一—一八五一、名は弼、字は承弼)を取り上げる。

赤水と両者のつながりは、「古今学話」にその関わりを見ることがができる。

「文化紀元(一八〇四)の春、「物子雪冤」を草て江都の太田錦城に示し、物を非するの妄を弁じ、その答を募る。錦城その世を終まで一字の答なし。又「古今学論」を撰て浪華の筱小竹におくる。今に至て答論をみず。蓋し錦城・小竹並英俊の士、余をその人にあらずとして答をなざるのみ。余愠なきこと能はず」(「古今学話」)

両者ともに、提出した原稿を無視した者として赤水は批判的である。さて、赤水がその際、両者に提示した草稿である「物子雪冤」及び「古今学論」は、ともに「赤水文抄」に収録されている。「赤水文抄」に収められた両文が錦城・小竹両者に提示されたそのままのものであるかどうかは知る由もないが、最も重要な手がかりであることは疑いようもない。

大田錦城は、第1章の1でも言及した淇園の弟子であり、赤水の兄弟子にあたる。錦城は師淇園の学問を考証学という点で完成させた人物と言えよう。そして清朝の考証学の実証性と朱子学の道義的実践性の両面を追求し、『九経談』『大学原解』『中庸原解』『疑問録』などの著書を遺した。

さて、『物子雪冤』は、錦城の『九経談』⁽¹⁰⁾ 卷一総論の中から徂徠を批判する文を取り上げて反駁を加えるという、札記のスタイル(全九条、うち卷一第三〇条から七条、第二八条から二条)をとっている。錦城は同年にこの『九経談』を上梓しているから、赤水はいち早く『九経談』を入手し、反駁の草稿をしたためて錦城に提示したことになる。「物子雪冤」の細かな内容については、赤水の徂徠に対する視座について論ずる際に、『九経談』⁽¹¹⁾ とともに改めて論じることとし、本論ではその冒頭と末尾に見える赤水の錦城評を見ていくことにする。⁽¹²⁾ まず冒頭部の錦城評である。

「今、茲⁽¹³⁾ 戊寅の春(文政元年・一八一八)、江都に遊び、大田錦城に見ゆ。博覧俊才にして、古今を洞視し、別に赤幟を立つ。一偉人と謂ふべし。一日、其の『九経談』を取りて之を読む。尊信すべき者なきには非ず。然れども余を以て之を觀れば、其の学は猶ほ程朱に執泥するがごとし。是を以て物子を視ること仇讐の如し。其の論駁する所、一一紕繆せり。亦た惜しからずや」(『物子雪冤』)

即ち錦城は宋学の立場を取る者であり、不当に徂徠を批判する者に他ならないという評価である。

まず「客」が次のように言う。

「大田錦城は、漢宋の学を折衷し、偏党する所なきに似たるに、子、以て程朱に執泥すと為す。請ふ、其の詳を聞かん」(『物子雪冤』)

先に示した『古今学話』に於て、赤水自身、漢宋折衷の立場を標榜していた。したがって、「客」にとつては、錦城は赤水と同質の存在に見えたに相違ない。それに対する赤水の答えである。赤水は、まず『九経談』の卷一総論第七条の

「程朱二先生は、立志の遠、識見の高、漢唐明清の諸儒の⁽¹⁴⁾ 顛に高踞す。先に古人なく、後に来者なし。孔孟以後、実に二先生あるのみ。晦庵は則ち焉に加ふるに、博識多通を以てす。其の経解は、多く北宋諸家の善説を取りて、之を折衷す。以て其の家学は、集めて大成する者に近似す。故に其の伝はることの遠きこと、今に至るまで靡せられず。之を攻むる者ありと雖も、愈いよ攻むれば則ち愈いよ熾⁽¹⁵⁾ なりて、撲滅するあたはざるは、其の中に実に近聖の意の遠く諸儒の上に出づるものがあるが故なり。聖經を講じ、道義を明らかにするに、豈に之に由らざるべけんや」(『物子雪冤』)

という程伊川や朱子に代表される宋学を錦城が評価している文を示した上で、

「其の程朱を尊信すること此の如し。而れども先儒の数しは程朱を論駁するを見るに、仏老と帰を同じくするの⁽¹⁶⁾ 讖あり。其の勢、回護するあたはず」(『物子雪冤』)

と言い、錦城を「程朱に執泥する者と論断する。続いて見える宋学が「仏老と帰を同じくする」ということについては、『九経談』

第一総記第八条に見える

「程朱の説は、仏老に浸淫する者なり。是れ其の学の短なる所なり。其の短なる所を去りて、其の長なる所を取れば、則ち未だ必ずしも粹然たらずんばあらざるなり」（「物子雪冤」）

ここに見える宋学の短（仏老に浸淫している点）を棄てて、宋学の長を選び取っていけばよいとする錦城の見解に対して、

「然らず。蓋し程朱の礼楽を離れて性理を説くは、固より先王孔子の道に異なる。夫れ心性を主とし道徳を談ずるは、夫の空を説き智を説く者と何ぞ扱ばんや」（「物子雪冤」）

と答える。つまり宋学がその基本的な部分で孔子の道に抵触していることを説き、錦城の見解に疑義を唱えているのである。そして錦城の宋学を「漢唐諸儒の巔いただに踞す」と位置づける姿勢を、「阿党の甚だしきなり」（「物子雪冤」）と論断するに至る。

赤水の立場からすれば、錦城も「亦た之（宋学）に惑ふことの甚だしき者なり」（「物子雪冤」）であった。

二

篠崎小竹は、儒学者篠崎三島（一七三七—一八一三）に古文辞学を学び、その養子となった人物で、後に尾藤二洲・古賀精里に朱子学を学んでいる。

さて、赤水が篠崎小竹に提出した「古今学論」であるが、その提示年代の確定はできない。ただし、「古今学論」の末尾部に、赤水の篠崎評が記載されており、そこに

「篠翁三島は古学を唱へて其の世を終ふ。其の嗣承弼は、家学を変じて程朱に帰す。蓋し見し所ありて然るか。將に風習の尚ぶ所、聡明の士と雖も、亦た自ら覚らざるか。愚見を畧書して、

敢て其の正を請ふ」（「古今学論」）

とあって、赤水にとっては、この小竹もこの時には既に程朱学者として認識されている。小竹が江戸に出て尾藤二洲に朱子学を学び始めたのが一九歳（一八〇〇）の時であり、しかも赤水は大阪に移り住んだ後の小竹に「古今学論」を提示していることを考え合わせれば、赤水が大田に「物子雪冤」を提示した一八〇四年以降の、そう遠くない頃と推定される。

問題の「古今学論」であるが、その要旨は、中国の古典が孔子の思想を伝えることに「純なる者」と「雑なる者」とがあることより説き興し、漢宋二学の大きな相違点は「孟子」を「雑」とするか「純」とするかに起因すると述べる。以下の如くである。

「古今の間、経を説く者は、無慮数百家。而るに其の要を言ふは則ち漢宋の二家に出でざるのみ。……『詩』『書』『易』『春秋』『儀礼』『論語』『孝経』『大学』『中庸』は、道載せて純粹なる者なり。而して『礼記』『家語』『説苑』『孟』『荀』『楊』の書は、則ち雑ふ。……世、徒だに『荀』『楊』の雑を知るも、未だ『孟』の雑を免れざるを知らざるなり。……宋儒は孟子を過信し、其の書を『論語』に嫌す。而して性情・道徳・仁義・礼智、一へに諸を『孟子』に求め、而る後に牽きて以て先王孔子の言に合はず。間合はざる者あらば、則ち本然氣質種種の説を建て、以て之を彌縫す」（「古今学論」）

赤水は「孟子」を「雑」とする立場を取る者であり、「孟子」を「純」と認定する宋学を批判する。同旨の主張は「古今学話」にも見え、そこにはより具体的

「余熟じよくら宋学を考るに、一に孟子を主とせり。故に尊信する

こと大過なり。其言曰「孟子は未だ聖たらざるなり。然ども学は既に聖所に至れり。」その見解、すでに此の如し。ここを以て「孟子」の言に於て、一言半句も疑を入れず。而その言の孔子に合ざるを覩て、卒に本然氣質の二性を唱へ、孔孟の言を彌縫し、始て其学をたつ。その説は巧なれども、本然の性、諸經に徴すべき文なく、孔門諸子の語に証すべきなし。実にその自見に出で、古道を乱の大なる者なり。「書」に曰「聰明を作して旧章を乱すことなかれ」と。程朱の如きは、「聰明を作」と謂べし」(「古今学論」)

と述べられている。ただし、赤水はこの議論の中で宋学のみを非として批判してはいない。「程朱は孟子の学を為して誣すること非ざるなり」(「古今学論」と言うように、宋学は「孟子」を正しく継承しているとする。つまり誤りは「孟子」の段階で既に生じているのである。

「蓋し其(宋学)の違背するは、孟子に在り」(「古今学論」と記す通りである。もちろん宋学に非がないわけではない。宋学は「孟子」の取捨を誤つたものとして位置づけられている。

「(孟子の)主意の在る所、善く之を修むれば、未だ道を害するに至らず。要は之を沙汰し、其の渾金なるを取れば、固より崇奉すべし。唯だ宋儒は則ち其の瑕を収めて以て道の本原と為す。是が故に其の説皆違ふ。所謂、毫釐千里なり。慎まざるべけんや」(「古今学論」)

そして、宋学の性善の立場によれば、「其の究、桀紂も亦た性は善なりと言はざるを得ず」(「古今学論」ということになり、ここから新たに

「遂に聖人より塗人に至るまで、其の性は一にして、氣質を變化して、本性に復す等の説を致す」(「古今学論」)

という議論が派生していくとして問題視している。そして、この宋学の主張から生じる「聖人、学んで至るべし」というテーゼに對し、「論語」陽貨の「性相ひ近し、習へば相ひ遠し」「唯だ上智と下愚とは移らず」、「書経」仲虺之命の「惟れ天、民を生じて欲あらば、主なくんば乃ち乱る。惟ち天、聰明を生じて時れ又めしむ」などを典故として、

「聖人の別に天命ありて在るを見るべし」(「古今学論」と言い、聖人は一般の人々(中人)とは異なる天命をもつてこの世に生み出された存在と位置づけて、

「豈に凡民の固より有する所ならんや」(「古今学論」と結論づける。したがって、もとより「道を己に属す」(「古今学論」)小竹とは相容れようもなかったと言えよう。

第3章 鉛本子敬と藤沢東暉

本章では、赤水が老年期に知り合つたと思われる二人の人物、鉛本子敬(生卒年不詳)と藤沢東暉(一七九四—一八六四、名は甫、字は元登)について言及する。

鉛本子敬については「赤水文抄」所収の「問学」に「(鉛本子敬)阿波に由来す。七條草史を介して余に見へて……」

(「問学」)

と記されていることから、また藤沢東暉については「古今学論」の巻頭に両者の往復書簡が掲載されていることから、赤水と両者との交流を知ることができる。

鈴木子敬なる人物は、「問学」の冒頭に

「安房の人、鈴木子敬。幼きより宋学を其の郷に学び、弱にして江都に出て、大田錦城を師とす。居ること歳余にして其の郷に帰る」(「問学」)

とあり、子敬が錦城の弟子であつたことがわかる。子敬の生卒年や赤水と交流した年代については、全く手がかりがないのだが、子敬が二〇歳の時に江戸で錦城に学んでいること、赤水と大田が四つ違いであることから考えあわせれば、子敬は赤水よりもかなり年下と考えて大過あるまい。

さて、赤水と子敬との問答を筆記したものが「問学」である。

その「問学」の末尾部には

「子敬再拜して曰く、「請ふ、留まりて教を受けん」と。居ること七閏月。適たま親の招くことありて即ち帰る」(「問学」)とあることから、子敬はこの問答の後赤水を信奉し、その後七ヶ月間、彼の下で古学を学んだようである。

「問学」の具体的内容については、中ほどに「子、宋儒の説に固執して之を読む。是が故に(徂徠を)疑ふのみ」(「問学」)とあるように、徂徠学に疑問を抱く子敬に対し、赤水がその誤りを正すというものである。「問学」に示される子敬の発言の主旨は、徂徠は道を先王が作ったものと主張しているが、道はもともと人の性に存するものではないのか。そして、それは「孟子」に明言されているのではないのか、という二点である。以下その流れを簡単に追ってみた。

まず子敬の「物事に釈然たらざること年あり」(「問学」)と言つ

た上での第一の問いである。

「徂徠は)道を以て先王の作と為す。是れ孔門の言はざる所。天下の学を乱すと謂ふべきのみ。『書』に云ふ「維れ人は万物の靈」と。又云ふ「恒ある性に若ふ」と。『詩』に曰く「天、烝民を生ず。物あれば則あり。民の秉彝、此の懿徳を好む」と。『中庸』に云ふ「性に率ふを之を道と謂ふ」と。道は果して人の性の有に非ざるか。『詩』『書』及び『中庸』の言は、皆廃すべきか」と(「問学」)

この問いに対し、赤水は

「蓋し夫子の道の先王より出づるを言はざるは、時に未だ異言あらざるを以てなり」(「問学」)

と言ひ、孔子が道は先王から出たものであることを敢えて言わなかつたのは、当時それとは異なる意見がなかつたからだとし、以下、「然れども諸を文辞の間に徴すべき者は則ちあり」(「問学」)と述べた上で、「孝経」「論語」「孟子」「礼記」「漢書」「新書」「新語」など多数の典籍を引用し、改めて「明らかに道の聖作なるを言ふ。子何ぞ物子の舛むる所と為すか」(「問学」)と言つて、道が先王の作であることを証明する。

そして、子敬がかくの如く誤解するに至つたのは、「子が誦する所の『詩』『書』及び『礼記』の語は、後世多く誤る」(「問学」)ことに基づいているとし、宋学の古典解釈に問題があるとする。それを受けての子敬の第二の問いである。

「孟子」曰く「仁義礼智は、心に根ざす」と。之を証す。今日、人皆惻隠・羞惡・辞讓・是非の心あり。此に由りて之を觀れば、道の人の性より発すること、多辞を仮らざるなり」(「問

学)

この問いに対する赤水の答えは以下の如くである。まず、性の本質に関して、

「慣習自然、仁義礼智、心に根ざす。亦宜ならずや。孟子、此に観ることありて、言を立てて以て諭ふるのみ。其の実は道化の人心に入りて、識らず知らず、帝の則に従ふ者なり。……古今の人性の異なるに非ざるなり。道の行・不行を以てなり。故に道は聖人の制する所にして、人の固有に非ざること審らかなり」(問学)

と言ひ、孟子の真意は仁義礼智が心に基づくことの主張にあるのではないとする。人々の心の内に道が入り込んで教化されたのだと言うのである。したがつて、人の性そのものに差異があるのではなく、道を行うか行わないかに問題があるとする。しかし、宋学者たちは、

「夫れ宋儒は道を己に取りて、心性窮理を以て学の至りと為す。象山曰く「我の六経に注するに非ず。六経、来りて我に注す」⁽²³⁾と。是れ聖を以て自処するなり」(問学)

であるとし、ここに大きな誤解が生じてしまったのだと言ふ。尊敬の誤解もここに起因するということであろう。そして、赤水自らが信奉する古学については、自ら聖人であると自認するのではなく、あくまで先王孔子ら過去の聖人の教えに基づき、自らの才・徳の達成を期するのだと言ふ。

「夫れ古学の発するは、一へに聖人を奉りて疑はず、礼を以て心を制し、義を以て事を制し、仁に依り、徳に拠り、芸に遊び、⁽²⁴⁾遊び息み、其の成るを期す。蓋し君子の教は、和風甘雨

の如し。小木の之を得れば小成し、大木の之を得れば大成す。

人の学に就くも、亦た唯だ其の才を尽くし、其の徳を達するのみ。小成・大成は、自ら命あるのみ。故に孔門の弟子三千、其の大成する者は僅かに七十余人。今、人は聖人と為るべしと言ふは、豈に誣に非ずや」(問学)

とりわけ末尾部に於て、才には大小があり、人々に大成・小成の差異が生じるのは、生まれながらの「命」によるものであるとして、その論の確かさを主張している。

子敬の古学に対する蒙を啓かせ、以降師事せしむるに足る明晰な解答であつたと言えよう。

二

藤沢東咳は讃岐生まれの儒学者で、中山城山に学んだ。二五歳で長崎に遊学した後、三〇歳の時に大坂に出て泊園書院を設立した。『原聖志』『思問録』などの著作があり、天下に名を知られた存在であつたと言ふ。

赤水と東咳の往復書簡が『古今学話』の巻頭に据えられることになつた経緯については、往復書簡の後に記されている赤水の門人岡元某の一文から知ることができる。

「赤水先生は、古学に従事し、恒に宋学に反す。嘗て云ふ「孔子曰く「信じて古を好む」と。又曰く「古の学者は己の爲にす」と。又曰く「君子は道を謀りて、食を謀らず」と。我何ぞ性理を唱へて、時好に合せんや」と。独り物子の「経を以て経を証す」の言を善しとし、奉じて以て六経を治む。問其の合せざる者あれば、⁽²⁵⁾諸を古言に考へて之を易ふるのみ。適たま浪華東咳先生の『清版二弁記』を読む。嘆じて曰く「図らず、世に

若人の古学の衰ふるを興す者あり。斯の人に非ずんば其れ誰か」と。是に於て書を寄せて好^よを結ぶ。今『古今学話』を梓行するに、二先生の書二篇を卷首に載せて以て序に代ふ。衰を興すの一助とならんことを庶^{ねが}ひて云ふのみ（『古今学話』岡元跋）
もともと『古今学話』は、「塾生の問ひに答へて、『古今学話』を草し、附するに「一二の管見を以てす」（赤水先生寄東咳先生書）」とあるように、赤水の門人たちとの問答の中で生まれたものであった。そして門人たちの中でも、とりわけ山田該介は赤水の繼承者として目されていた感がある。たとえば、『赤水文抄』の末尾に添えられた赤水の弟子井阪祐一の文には

「向者、山田好文、赤水先生に就きて古今の学を問ひ、退きて筆記す。業未だ成らざるに、嬰^{わか}して病死す。天保乙未（天保六年、一八三五）の夏、先生、適^{たま}たま山生の記す所を見て感ず。是に於て修補して『古今学話』一卷・『古学字義』二巻を為し、以て其の志を成すと云ふ」（『赤水文抄』）『古今学話』附録小引）とあって、赤水は該介の夭折を悼み、彼のノートに加筆して『古今学話』、『古学字義』を草したとある。ちなみに、該介の卒年に關しては天保年間に二六歳で死亡ということしかわかつていないのだが、仮に同天保六年（赤水六七歳）に死亡していたとすれば、赤水とは四〇ほど歳の差があったことになる。

想像をふくまずならば、赤水は該介を顔淵とオーバラップさせていたのではないか。つまり赤水にとって、自らの後継者と目していた該介の死後、赤水に「世に若人の古学の衰ふるを興す者あり。斯の人に非ずんば其れ誰か」と言わしめた東咳の存在は、晩年の赤水にとつては一条の光であつたに違いない。この往復書

簡は、いわば赤水古学の繼承と捉えることも可能であろう。

さて、この書簡の往復は東咳の赤水宛書簡の中に「城山、五年前に没す」（東咳先生復赤水先生書）とあり、東咳が自らの師中山城山の天保八年（一八三七）の死に言及していることから、天保一三年（一八四二）に交わされたものであることがわかる。時に赤水七四歳、前年に『赤水文抄』を刊行している。また、東咳は四九歳。親子ほどに歳の離れた両者である。

では、以下両者の書簡を簡単に見ていくこととしたい。ただし、両書簡は思想的応答を記すものではなく、互いの自己紹介と相手の賞賛、そして古学の現状について語るという内容になっている。まず赤水から東咳に宛てた書簡であるが、ここには赤水が東咳を知った経緯が記されている。

「適^{たま}たま京儒海屋⁽³⁰⁾の書を得。示すに一小冊を以てす。之を披^ひけば則ち足下の『訂正清版二弁』を鈔出し、因りて以て清人錢泳なる者に寄す。祐、始めて本邦に足下あるを知る。而して物子の学を審らかにして、西土に行はしむ。錢氏、之を梓するの状あり。錢氏、物子を尊信して曰く、「六万余言、皆経を以て経を証す。孔子に折衷し、並びに浮辞汎説なし」と。乃ち是れ暗に我の見し所に符す。子雲⁽³¹⁾を後世に望むとは、即ち是れのみ」（『赤水先生寄東咳先生書』）

とりわけ、末尾に見える「子雲を後世に望むとは、即ち是れのみ」という一文は注目に値する。というのは『古今学話』の末尾に

「翁憮然曰「われ老たり。争論を好まず。足下は今の楊子雲なる哉。天下の広き、亦楊子雲あつて足下を和せん」と」（『古今

学話)

というくだりがあり、赤水との論争に敗れた宋学者が、赤水を揚雄にたとえ、赤水を理解し賛同してくれるもう一人の揚雄が必ずどこかにいてくれるだろうと言っている。赤水にとって東咳はもう一人の揚雄であった。

そして、東咳の古学者としての学識を称して

「物事に忠なる者、優渥濃至にして、人をして敬服せしむ。嗟乎、当今の世、古学の衰を興す者は、足下に非ずして其れ誰か」

(「赤水先生寄東咳先生書」)

と記している。

それに対する東咳の書簡も同様に自らの経歴及び著作について述べた後、徂徠に関して

「物先生の卓絶の識は、直ちに闕里³²の端門を得。古今の儒林、

未だ其の比するものを見ざるなり」(「東咳先生復赤水先生書」)

と、その見識を賞賛し、現在ではその学流が衰退してしまっていることを憂え、

「独り近世の濶園学を修むる者は、以て誉を致すべからず、禄を干むべからず。復古の衰ふること極まれり。然れども誉と禄とを抛ちて之を修むる者は、真に之を嗜むものなり。真に之を嗜む者、海内幾何ぞ」(「東咳先生復赤水先生書」)

と記している。そして赤水が先に贈った著書³³に対して次のように述べている。

「高著を披き、彷彿として記する所あるが如し。黙して反求するに、往年、之を先師の案頭に見る。先師は則ち讀の逸士中山城山なり。……今、先生の書を誦するに、先師の言を聞くが如

し。注想して堪へず。傾倒して以て罄せざるを得んや」(「東咳先生復赤水先生書」)

「高著の論する所、詳細にして痛快なり。悉く鄙衷と吻合す」

(「東咳先生復赤水先生書」)

とりわけ、最初の部分は、東咳の師中山城山も赤水の著作に少なからず心酔していたことを予想させる。

そして、赤水を「同嗜の人」(「東咳先生復赤水先生書」と認め、赤水の多大なる自分への期待に

「凡そ事は因あり時あり。誣ふべからざるなり。安くんぞ他日に古学中興の運に遇はざるを知らんや。而るに先生は甫を以て之に任ず。則ち過獎の言なり。敢て当らず、敢て当らず」(「東咳先生復赤水先生書」)

と記し、最後に、

「改歳の際、甫、当に旧国に赴くべし。若し数日の暇を得ば、將に専門を敲きて道範を仰がん」(「東咳先生復赤水先生書」)

と言つて擲筆している。実際に東咳が赤水のもとを訪れたかどうかは定かではないが、この書簡を受けた時の赤水の喜ぶ様は想像に難くない。赤水が晩年にして出会えた知音の一人と言えよう。

おわりに その他の交流者

本稿では赤水と交流した六人の儒学者について論及してきたが、もちろん阿波藩に於ける交流の記録も多数存在する。

最後に、その幾人かを紹介しておきたい。まず提示すべきは龍閣関連の人々であろう。墓碑銘に次のようにある。

「平島郷村と隣し、旧將軍足利氏の裔、寓するあり。……土人、

之を平島公と謂ふ。公は文学を好み、『栖龍閣集』あり。嘗て京儒島津華山を聘して、賓師と爲す。君も亦從遊し、乃ち華山に因りて公に謁す。公見て之を親愛し、勉めて以て成るあらしむ。華山及び富濟仲の輩と、毎に公の宴に陪し、詩を賦し樂を奏し、弦誦の声、闈閤に溢る。又濟仲と日夕講肄し、朝ら經義を治め、衆説を會して漢儒を宗とす……華山没するに及んで、公の龍滋渥し」(墓碑銘)

ここに名前の見える、九代目の平島公方平島義根(一七四七—一八二六)、及び島津華山(一七三七—一七九四)、富本濟仲(一七六七—一八二三)らは、赤水の阿波に於ける交流者である。とりわけ富本濟仲については『赤水文抄』『本論』の末尾部に

「余、本論を著して以て人に示す。人の以て奇僻と爲さざるはなし。唯だ亡友の土井申伯・富本濟仲のみ、謂ひて信に然りと爲す」(『本論』)

とあって、土井申伯(不詳)とともに、赤水が自らの著述をなすたびに一読を願う学問上の知音であった。

また、阿波藩に於ける古学のリーダー的存在であった仲道齋(一七二二—一七八八)も見落としてはなるまい。奇しくも道齋が没した天明八年(一七八八)が、赤水が古学を志した二〇歳の年である。

加えて、赤水の門人としてその名が見えるのが山田該介と岡元某である。両者ともに本稿第3章2でも少しく言及したように、該介は『古今学話』にその発言が二ヶ所見え、また岡元某は、『赤水文抄』所収の「答岡生」に発言が見える。岡元某は『古今学話』の跋文の執筆者でもある。

この外、『赤水文抄』に書簡が収められている天羽某(「再復天羽生」、石田某(「答江戸石田生」)、『赤水文抄』の跋文を執筆している井阪祐一(本稿第3章2)などが交流者として挙げられよう。これらの人物の詳細は、未だたどれていない。次回を期したい。

—高橋赤水略年譜—

1769	1	池田家家臣の父の三男として生まれる
1783	15	京都に遊学して医学を学ぶが、ひと月にて帰郷
・ ・ ・		この時期、京都に再遊学し、皆川淇園に学ぶ
1788	20	京都より帰郷、古学を志す
		■仲道齋(一七二二生)没
1789	21	■那波魯堂(一七二七生)没
1794	26	■島津華山(一七三七生)没
1802	34	猪飼敬所に学ぶ
1804	36	「物子雪冤」を大田錦城に提出
・ ・ ・		この時期「古今学論」を篠崎小竹に提出?
1807	39	■皆川淇園(一七三四生)没
1818	50	大田錦城に江戸で会す
1823	55	■富本濟仲(一七六七生)没
1825	57	■大田錦城(一七六五生)没
1826	58	■足利義根(一七四七生)没
1835	67	このころ故山田該介の記した所により「古今学話」及び「古学字義」を草す
1841	73	「赤水文抄」上梓

1842	74	藤沢東禰と書簡を往復
1845	77	■猪飼敬所(一七六一生) 没
1847	79	『古今学話』上梓
1848	80	八月一日没
1851		■篠崎小竹(一七八一生) 没
1863		■貫名松翁(一七七八生) 没
1864		■藤沢東咳(一七九四生) 没

—註—

(1) 室町幕府將軍足利氏の末裔が阿波国平島庄に移り住んだその八代目平島義宜が設けた学問所。この平島公方の漢学については竹治貞夫氏の『近世阿波漢学史の研究 続編』(平成九年・風間書房)に詳細な研究がなされている。

(2) 『赤水文抄』は天保二二年(一八四一)、赤水が七三歳の時に刊行したもので、それまでの赤水の主だった著作や書簡が収録されている。収録されているのは、『本論』『古今学論』『答江戸石田生』『問学』『復敬所翁』『答岡生』『物子雪冤』『文家正名題言』『説斥非』『再復天羽生』の一〇篇である。なお、今回、四国大学凌雲文庫所蔵のテキストを使用していただいた。また『古今学話』は、弘化四年(一八四七)、赤水が七九歳の時に刊行したものである(草稿は天保六年、一八三五)。なお、『古今学話』については徳島大学総合科学部紀要言語文化7・8に翻刻・訳註を掲載した。加えて、墓碑銘が記す未刊行の『周易説』『詩経伝箋弁異』『三礼考証』『学庸精要』『論微二并放』『古学字義』『導蒙瑣言』『对夫子』『赤水文抄』に名が見える『文家正名』などの著作があったらしい。なお、現存する『古今学話』および『赤水文抄』より読み取れる赤

水思想については、拙稿『阿波の古学者・高橋赤水の思想』(広島大学・東洋古典学研究11)に於て論じている。併せて参照されたい。

(3) 現徳島県那賀郡那賀川町赤池の西光寺に存する彼の墓石に、貫名松翁による墓碑銘が刻されている。この墓碑銘については竹治貞夫氏が『阿波碑文集』(昭和五四年)に訳註を掲載しておられる。

(4) 猪飼敬所の『猪飼敬所書東集』は、『日本儒林叢書』第三卷(鳳出版)に収められている。

(5) 『文家正名』は註(2)に既出。また『赤水文抄』に『文家正名題言』が収められている。

(6) 註(2) 既出の未刊行の一つ『論微二并放』をさす。

(7) 赤水が徂徠の非を正す文は現存する赤水の著作にもいくつか見られる。たとえば『赤水文抄』所収の『答岡生』は、『五常』の解釈に關して自らの見解を述べた上で、徂徠の『弁名』に見える『五常』解釈を批判し、『物子の博識をして、猶ほ疎漏を免れざるかな』と述べている。この問題については注(2) 既出の拙稿『阿波の古学者・高橋赤水の思想』第3章で詳述している。

(8) 『論語』衛靈公に「子曰く、衆之を悪む、必ず察し、衆之を好む、必ず察す」とある。必ず自分の目で真相を見極め、他者の意見に盲従しないことを説いたもの。

(9) 『孟子』尽心上に「孟子曰く、文王を待ちて而る後に興る者は、凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王なしと雖も、猶ほ興る」とある。すなわちここに言う「豪傑の士」とは、人の教化に頼らずともすぐれた才知を有し、しかもそれを發揮できる者のこと。

(10) 『九経談』については、『日本儒林叢書』第六卷(鳳出版)に収められたものを参照した。

(11) 九条中の一条と五条については、註(2) 既出の拙稿「阿波の古学者・高橋赤水の思想」第3章二に於て論及した。

(12) 冒頭と末尾の大田評は、文政元年に錦城に会した記述があることから、その後書き加えられたものということになる。

(13) 「純なる者」と「雑なる者」の問題については、注(2) 既出の拙稿「阿波の古学者・高橋赤水の思想」第1章二で詳述している。

(14) 「書経」蔡仲之命に「聡明を作して旧章を乱すことなかれ」とある。

(15) 「史記」太史公自序に「之を毫釐に失へば、差は千里を以てす」とある。初めはわずかな違いでも、やがては大きな違いとなること。

(16) 「聖人、学んで至るべし」に関する赤水の見解については、注(2) 既出の拙稿「阿波の古学者・高橋赤水の思想」第2章一で詳述している。

(17) 「書経」秦誓に「維れ天地は万物の父母、維れ人は万物の靈なり」とあり、湯誥に「維れ皇いなる上帝、衷を下民に降す。恒ある性に若ひ、克く厥の獸を綏んぜしむるは后たり」とある。

(18) 「詩」大雅・蒸民に「天、烝民を生ず。物あれば則あり。民の秉彝、是の懿徳を好む」とある。

(19) 「中庸」に「性に率ふを之を道と謂ふ」とある。

(20) 赤水が引用した文は以下の通り。「孝経」開宗明義「先王、至徳要道ありて、以て天下に訓ふ、「論語」子罕「文王既に没して、文、茲に在らずや。天の將に斯の文を喪さんとするや、後れて死する者は、斯の文に与かるを得ざるなり」、「論語」雍也「誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ることなからん」、「孟子」尽心上「公孫丑云ふ「道は則ち高し、美し。宜んど天に登るが若く、及ぶべからざるに似たるなり。何ぞ彼をして幾及すべくして日に孳孳たらしめざるや」、「礼記」楽記「先王は之を性情に本づけ、之を度数に稽へ、之を礼樂に制す」及び

「聖人は父子・君臣を作爲して、以て紀綱と爲す」、「漢書」董仲舒列伝「聖人は天に法りて道を立つ。博愛にして無私。道の大なること、原、天より出づ」、「新書」俗激「夫れ君臣を立て、上下を等しくし、父子をして礼あり、六親をして紀あらしむ」、「新語」道基「天、万物を生じ、以て地之を養ふ。聖人之を成し、功徳參合して、道術生ず」。

(21) 「孟子」尽心下に「仁義礼智は、心に根ざす」とある。

(22) 「詩経」大雅・皇矣に「識らず知らず、帝の則に順ふ」とある。

(23) 「陸象山全集」卷三四に「或ひと先生に問ふ「何ぞ書を著はさざる」と。対へて曰く「六経、我を註す。我、六経を註せんや」と。あるいは「学、苟も本を知れば、六経は皆我が註脚なり」といつた文が見える。

(24) 「書経」仲虺之誥に「義を以て事を制し、礼を以て心を制す」とある。

(25) 「論語」述而に「道に志し。徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」とある。

(26) 岡元某は「赤水文抄」所収の「答岡生」(註(7) 既出)の岡某と同一人物であると推定される。

(27) 「論語」述而に「述べて作らず、信じて古を好む」とあり、憲問に「古の学者は己の爲にし、今の学者は人の爲にす」とあり、衛靈公に「君子は道を謀りて食を謀らず」とある。

(28) また「古今学話」の末尾にも「山田生、よるこんで余が口授する所及び客と学を論ずるものを稍稍に筆記せり。生、名は好文該介と称す。篤学の士なり。不幸にして早く死す。一日その稿をみて其の志を恤み、頗る修補し古今学の一端をのべ、また「古学字義」を撰し、その是非を弁せり」(「古今学話」とあつて、同旨の文が述べられている。

(29) 阿波掃苔会編「阿波名家墓所目録」(昭和四二年)には、小松島市中田の共同墓地に墓石があり、天保年間に二十六歳で没とある。

(30) 貫名松翁(註(3) 既出)のこと。

(31) 前漢末の思想家、揚雄（前五三―一八）のこと。子雲は字。『太玄経』『方言』などの著作を残した。揚雄が聖人（孔子）の著作を模したことなどから、程朱学では批判の対象となっている。

(32) 山東省曲阜県内にある孔子の旧里の名。

(33) 赤水が城山に寄贈した著作が何であるのかは判別できない。城山が没する一八三七年以前には赤水は著書を刊行していないので、「物子雪冤」や「古今学論」、或いは註（2）既出の未刊行著作、或いは「古今学話」の草稿のいずれかであろう。

(34) ともに門のこと。

(35) 仲道齋については竹治貞夫氏が「文章の鬼才仲道齋」（註（1）既出の著書第1章）に於て詳細に論じておられる。